

「ガラージュAI（仮題）」

lesaria

六限の終わりを告げるチャイムが鳴り、生物の教師が授業の終わりを告げる。

<教科書>の電源を落とし、教室からでて、私はロッカーへ向かう生徒たちを縫い、自分のロッカーへ向かう。

ロッカーを開け<教科書>を放り込み、カラー型の<アダプタ>を取り出して首に身に着ける。

ネットワーク接続を回復し、メールのチェックを指示する。マイクロマシンで形成された脳内の回路が思考を読み取って<アダプタ>に指令を送り、<アダプタ>が処理した結果を直接視覚野に出力して、視界にメールの新着を示すアイコンが現れる。

リュックを取り出し、ロッカーを閉じる。 エントランスへ向かいながら学校からの案内を読み終わった頃、学校帰りの友人からのメールが何通か入って来る。

それを読み、返事を書きながら、地下鉄への階段を下る。

書き終わったメールを出して改札をくぐり抜けながらレナに電話を掛けた。

「レナ、あんた今どこ？」

「ソリス・ストリート」

抑揚のない返事が返ってくる。

「あんたの学校から随分遠いわね。そんな所で何してるのよ」

「猫探してるの」

「学校はどうしたの」

「休んだわ」

「へえ、あんたがねえ、いったい幾らでそれ、頼まれたのよ？」

「ただ」

「ただあ？」

「そう、女の子に頼まれたの」

「あんたバカあ？」

大きく息を吸う。

「いい、そんなこと、後回しにして」

返事を聞かずにたたみ掛けるように続ける。

「お昼にメールで知らせたように、新しい依頼があったの」

「それで？」

気の抜けるようなレナの返事をこらえる。

「それで私、ロウエル大学に行くことになってるから、貴方も来なさい。校門前に着いたら連絡して、いいわね」

「分かったわ」

正直、この子は苦手だ。私は少し疲労感を感じながら電話を切った。

スキアパレッリ駅につき、駅のトイレでプリーツスカートとハイソックスにワンピースから探

偵業用の濃紺のスーツに着替える。

駅のロッカーへリュックと一緒に放り込んで、ロウエル大学へ向かう。

満開の桜の下、坂を登り大学の門をくぐる。メールでは内密にということだったので、学生達がそうするように、校門脇にある受付を通さずに、校内にはいった。

ローカルインフォメーションから周辺地図を視界に呼び出す。

情報工学部棟の位置と現在地を確認し、二棟奥の建物の三階にある人工知能研究室に、依頼者を訪ねる。

「職員、ジル・レナード」と書かれた名札をした男が、「教授、フィル・スペクター」と刻まれたプレートが掲げられた扉の前まで私を案内した。

ちょうど、約束の三時半にさしかかろうとしていた。レナードは部屋をノックして、「教授いらっしゃいますか？エリカ・エングラ様をお連れしました」と声を掛けた。

「お通ししてください」

中から神経質そうな声がする。

扉を開けたレナードに礼をいい中に入る。スペクター教授と思しき人物が、そわそわと、椅子をゆすりながら、机に向かって座っており、壁一面を覆う、紙で出来た本を並べた棚を背に、同じく反対側の壁を覆う、スクリーンに開かれた幾つものウィンドウを見つめていた目線をこちらに向けた。

「はじめまして、エリカ・エングラです」

手を出して握手を求める。

「よろしく申し上げます。私がフィル・スペクターです」

差し出した手を握ると汗ばんでいて、声に落ち着きがない。

「私はこれで」

レナードは一礼して、扉を閉めて立ち去った。

「どうぞお座りください」

ソファへの着席を促され腰掛ける。

スペクター教授は机から離れ、対座して座り、口を開いた。

「実は昨日、この部屋の中から開発中のある装置が盗まれました」

「装置とは？」

「特別な教育を施した新型人工知能です」

「警察にはご連絡されましたか？」

「実は警察には連絡しておりません」

「何故ですか？」

「詳しくは申せませんが、大学には秘密にしておきたいのです」

「ですが、窃盗は探偵より、警察に通報したほうが解決に結びつきやすいと思われそうですけれども、考えなおされてはいかがですか」

「いえ、外に漏らす訳にはいかないのです。どうしても漏らせない訳があるのです」

頑ななので、質問を変える。

「盗まれた人工知能はいったい何の目的で作られたものですか？」

「捜査に必要ですか？」

「ええ、多分必要になると思います」

「ガラージュという音楽のジャンルをご存知ですか？」

「ガラージュ……ですか？」

正直何のことか分からなかった。

「そうです。ガラージュです。ガラージュというのは、二十世紀の地球で生まれた、ハウスのサブジャンルに当たる音楽ジャンルのことです。三十八歳で死去したラリー・レヴァンというDJがパラダイス・ガレージというディスコで掛けた音楽が元になり、その後のハウスシーンに大きな影響をあたえて、ガラージュというジャンルになりました」

「そのガラージュが今回の事件とどう関係があるんですか？」

「今回、育てた人工知能はガラージュに属する曲を選び出すんです」

電子工学部棟の一階ロビーのベンチに座り未だ連絡のないレナに電話をする。

「今どこなのよ」

「駅に着いたわ」

「やっと、スキアパレツリ駅に着いたわけ？」

「ええ、着いたわ」

「いままで何してたのよ」

「猫を探してたの」

「すぐ来なさいっていったでしょ？」

イライラしてつい怒鳴ってしまう。返事がないので、仕方なしに聞いてみる。

「で、アンタ、猫見つけたの？」

「首輪を見つけたわ」

「首輪だけえ？」

「UDCナンバーを辿ったの」

「そう、それよ、今回も、それを辿らなきゃならないのよ」

「それでね、教授曰く、ミリッツ・エンターテイメント社の出資で開発していた。ガラージュA1のハードと、それを制御するソフトウェアが盗まれたっていうのよ。教授はそれを取り戻して欲しいって言うの、そして出来れば、その犯人を連れて来てほしいって」

ロビーのベンチで、待つこと十五分、少々だれて来たところに制服姿で現れたレナに一通り事件のあらましを説明し終わる。

「ところで、あんたよくその格好で補導されなかったわね？」

「ええ、大丈夫だったわ」

「あっそう」

「犯人の目星はついてるの？」

「インターフェイス・ソフトを盗んだ際の接続ログにUDCナンバーが残ってるはずだわ、追跡して欲しいの」

「分かったわ」

ストレージを開き、ファイルリストの中から教授からもらったログファイルを選び、共有されているレナのストレージに転送する。

「そのログ見てみて、それがあれば、手がかりになるでしょう？」

「ログ自分で取り出したの？」

「ソフトをコピーするときに、UDCナンバーが残ったんじゃないありませんか？って聞いたら、UDCのログ丸ごとくれたわ」

「犯人は外部の人間？」

「それを貴方が今から調べるんじゃない」

しばらくの沈黙。

「分かったわ」

レナがHMDで目を覆い、解像度の高い広い画面で作業をしだすのを見て、エントランス横に見つけた自販機へ向かい、コーラを買う。

一瞬、視界に預金額が表示され、そこから、コーラの代金分、残高が減り、表示が消える。レナの元に戻り、一口コーラを飲み。

「どう、分かった？」

レナに声を掛ける。

「もう少し待って」

仕方なく、もう一口コーラを飲み、ベンチに腰掛ける。

探偵業用の共有メールボックスを呼び出し、冷やかしゃ、悪戯と思しきメールを放り込んだフォルダの中から、小学生の女の子から来た迷い猫の搜索依頼メールを取り出す。

添付されてる写真にはオスの三毛猫が写っていた。

「ふーん、アンタ、この子探してるのね」

「見つからなかったわ」

「ふーん」

「名前なんていうの？」

「ジャン」

少し依頼者の女の子に同情しかけたとき、

「ここ一週間で、一回しか接続していないUDCナンバーがあるわ」

レナが淡々と言う。

「接続した時間は？」

「昨日の三時一四分頃よ」

「推定犯行時間帯に収まるわ、きっと外部犯ね、そのUDCナンバーを追跡しましょう」

レナがロウエル大学からカーソリス・ストリートを西にUDCナンバーのログが残る中継器を辿っていく。私はその後をついて歩く。バロウズ・スクエアを横目に、サビア・ストリート

を横切り、大気のない時代の遺物、沢山のシャボンのようなドームのある都市中心部を背に、ターラ・ストリートと交わる交差点でレナが立ち止まった。

「UDCナンバーが途切れてるわ」

「UDCナンバーが途切れてる？　じゃあ、どうやって追跡するのよ？」

「今この上の中継器のログを見てるの、一つ前の中継器には追ってるナンバーがあったの、でも、ここも、ここ以外の隣接する中継器にも、ナンバーが無いわ、恐らく、この近くで電源を落としたのね」

「それってどういうこと？　まかれたの？」

「偽装していたUDCナンバーを元のナンバーに戻したのかも知れないわ」

「UDCナンバーって偽装なんて出来るの？」

「出来るわ」

「じゃあ警察の目も欺けるってわけ？」

「そうなるわね」

「同じ位の時間に、この辺りから始まってUDCナンバーはある？」

「どうして？」

「ここで、UDCナンバーを切り替えたなら、犯人はこの辺りで本来のUDCナンバーで中継器に認識されてるかもしれないでしょう？」

「分かったわ」

レナが複数の中継器から所得したログから周辺の中継器に遡れないナンバーを探してる間、角の電気屋で、最新の<アダプタ>を物色する。

ストレージが増量され、最新のOSの乗った、処理が早くて、キュートなデザインの最新型が所狭しと展示されている。

並ぶ<アダプタ>の一つを手にとったとき、

「二つ見つけたわ」レナが言った。レナに向き直り、「どっちを追うの？」と問う。

「二手に分かれましょう」とレナが答えた。

「私一人でどうやって、UDCナンバーを追えばいいのよ！」

「プログラムをコピーするわ」

「えっと、私の<アダプタ>でも動くの？　なんの物理装置も追加せずに？」

「ええ、動くと思うわ」

「どうして、それを早く教えてくれないのよ」

「聞かれなかったわ」

「そ、そうね」

言葉に詰まった。やっぱりこの子は苦手だ。

「送ったわ」

レナの<アダプタ>からのファイル受信を許可し、ストレージに受け取る。

「コレどうやって使うの？」

レナから教わったとおりに、隣接する中継器からログを所得する。UDCナンバーをログの中から探しだしては、次に接続した中継器を探し、追跡していく。

UDCナンバーは携帯、アダプタ、TVなど、あらゆるネットワーク機器に割り振られており、行政のデータベース上で市民IDと関連付けられている。

UDCナンバーが分かればその機器の所有者が分かり、警察はそのデータベースにアクセスする権限が与えられていて、簡単に照会できるようになっているが、私たち探偵にはUDCナンバーの閲覧までしか権利が認められていない。

レナのソフトは、探偵に配られるいまいちな官給品とは違い、一度に複数の中継器のログを所得できる優れもので、追跡も楽にできると聞いている。

この辺りの人通りだとログは約三日分程残ってるようだが、UDCナンバーの検索もスムーズだった。私はパーシバル・シティの西にある湖畔を通るタヴィア・ストリートのホテル街にたどり着いた。

後章

エリカと別れた後、レナはターラ・ストリートを南に下り、パクストン・ストリートに行き付いた。

北西から南東へ伸びるパクストンストリートを下る。

古びた透明のドームに覆われたテラ・フォーミング時代の工場街へと続いており、UDCナンバーを追って中へ入った。

工場街は、人通りも少なく中継器に接続中の<アダプタ>も少なかったが、昨日の日付に加え、今日の日付のUDCナンバーがログに現れるようになった。

レナは、対象に近づいている確信を持った。パクストン・ストリートから、路地に入ると、小さな閉鎖された町工場の中に民家があり、まだ<アダプタ>適合施術を受けていないような年の子供らと時折すれ違う。

路地の奥へ奥へと進むと、寂れた廃工場の横で、中継器に目標のUDCナンバーが認識されていることに気付いた。

廃工場の中からは、話し声が漏れ聞こえ、中に人が数人はいそうな気配だった。

レナはスタンガンのバッテリーを確認してから、割れた窓から中の様子を伺う。声は聞こえるが、人影が見えない。

仕方なしに、その窓を開け、見える範囲に誰もいないことを確認した上で、中へと潜り込む。

そこには、事務机並べられており、上には事務用品が忘れられたままに散乱して埃をかぶっていた。

話し声は事務室らしき部屋の開きかけた出口からもれていて、レナは忍び足で、扉に近付きその隙間からそっと外を伺った。

西日の差し込むトタン屋根の下、置き捨てられた工作機械の上に少年が未施術者用の端末を持って座り、それを取り囲むように座る同じ年ぐらいの子供らに、なにやら熱心に話していた。

「だから、コレすごいんだって」

「もう聞き飽きたよ」

「俺の兄ちゃんの持ってる奴の方がすごいね」

「別に適応施術受ければ、誰だってそんな箱なしで出来るようになるじゃん」

レナが少年たちに近づくと、三毛猫を抱いた少女が振り返った。

「お姉ちゃん、だれ？」

その一声で子供たちがいっせいにこちらに目を向ける。

沈黙の中工作機械の上の少年が口を開いた。

「ここは俺たちの基地だ、勝手に入ってくんなよな」

レナは尋ねた。

「それ見せてくれない？」

かつてはフォボスと呼ばれた衛星が空にあがり、パーシヴァル・シティは月に照らされる。

タヴィア・ストリート沿いのホテル街、中継器にUDCナンバーのログが一昨日、昨日、今日と同じぐらいの時間に記録されており、対象の生活圏に近づいているように思えた。

その足取りを辿ると、ホテル街の裏、観光客が寄り付かない寂れた路地の真ん中で、中継器のログが途切れている。

ここ数日のログの情報を比較すると、毎夜ここでナンバーが消え、約5時間後に現れている。

あたりを見回すと、照明に照らされ階段が地下に伸びており、クラブ・ムオトの文字が電光板に躍る。かすかに、音楽がもれ聞こえていた。

「今何処にいるのよ？」

クラブを包む大音量の音の中、会話にならないであろう電話を避け、メッセージで連絡を取る。自分の発言が視界にインポーズされる。

「ジャンを見つけたわ」

レナからの返事が自分のメッセージの後へ続く。

「見つけた？ 何を」

「ジャンを」

「ジャン？」

「誰よそれ？ UDCナンバーはどうなったの」

「子供だったわ」

「子供？ それじゃあその線は無いわね。で、今どこにいるのよ」

「工場にいるの」

「どこの工場よ？」

「イラールよ」

「イラールってあの区画整理中の古いドームの？」

「そう」

「中継器からの情報によると、ここにいるみたいだけど、人が多すぎて、誰なんだかわからないのよ、どうすればいいの」

「そっちに行くわ」

「お願いすぐ来て、タヴィア・ストリーの近くにあるクラブ・ムオトよ」

クラブ・ムオトの出口近くのテーブル席に

陣取り、頼んだピザを食べ、ジンジャーエールに時折口をつけ、中継器が対象のUDCナンバーを認識し続けていることを確認しながら、レナを待つ。

ここのスタッフなんじゃないかと考えつつも、今ひとつ確信が持てず。フロアで踊り狂う客たちを眺めながめたり、退出する客の顔を覚えたりしながら、また一口、ジンジャーエールを口に含む。

大音量のボリュームの中、向かいの席にレナが座り、私の視界にメッセージが浮かぶ。

「今ついたわ」

「中継器から所得したデータじゃあ対象がどこにいるか分からないのよ、どうしたらいい？」

「三角測定をしましょう」

「三角測定ってなに？」

レナから小さな液晶パネルとアンテナのついた、長方形の箱を受け取る。

「これなによ」

「そのデバイスを認識して」

「えっと、認識ってどうやるの」

「デバイスマネージャを開いて」

レナから教えてもらってやっと接続して、言われるがままにコピーしてもらったインターフェイス・ソフトを開くと視界に多数のUDCナンバーがリストアップされる。

「これは、近くにあるネットワーク機器のUDCナンバーを所得するソフトなの」

「これでどうやって、対象を割り出すの？」

「これとそれで三角測定をするの」

私に渡したのと同じ、機械を持ってレナが言う。

「<アダプタ>は電波で中継器に接続されていて暗号通信を行っているけど、量子暗号化はされていないの。だから、電波で中継器と通信する電波を傍受して、UDCナンバーを拾えるの」

「それで？」

「電波の強さで距離が割り出せるから、三角測定ができるの」

「とりあえず犯人のUDCナンバーを選択すればいいのよね？」

「ええ、向こうの端に行くわ」

レナが出口の右側をさす。

「私はどうすればいいの」

「そこにいて」

レナが席を立ててフロアの端まであるいていく。

「測定を開始するわ」

レナからのメッセージが届くと同時に、視界にウィンドウが開き、レナと私と思しき点を線をつないだ線を底辺とする三角形が描かれ、頂点にUDCナンバーが表示される。対象のUDCナンバーだ。

表示によると、距離はおおよそ、二十メートルだった。

「これって、ひょっとしてDJボックスの中じゃない？」

「そのようね」

フロアを挟んで出口の反対側にあるDJボックスの中では、紫のニット帽を被ってサングラスを掛けた、Tシャツにジーンズ姿の男がスクラッチをしていた。

私はDJボックスの扉をノックした。DJと交渉して、教授と引き合わせるために、なんと切り出すか言葉を搜しながら、扉が開くのを待った。

しかし、ノックが聞こえないらしく、幾らまっても出てこない。バッジを見せて、もう一度ノックする。

こちらを一瞥するが、すぐにフロアに視線を戻す。ノブをまわすと鍵が掛かっている。

もう一度、激しくノックして、バッジを見せ、「探偵よ」と叫ぶと、男はバッジをまじまじと凝視した後、反対側の扉を開けて逃げ出した。

あわてて、腰のスタンガンを取り出す。それを見たDJはダンスフロアに飛び込む。私もDJを追って、ダンスフロアに飛び込んだ。

「まちなさい、警察じゃないわ、ただの探偵よ」

DJが踊る客を掻き分けて逃げるので、私は狙いを付けて、スタンガンを撃った。

DJと私の間に割り込んだ男が、スタンガンの電気を帯びた弾にあたり、痙攣して倒れる。

「勝手に射線にはいるから！」

私はDJとの間で踊る客を書き分け、DJに近づくが、DJは一足先にダンスフロアから抜け出し、出口でこちらを振り返り、にやりと笑って、崩れ落ちる。

横たわる男の傍にはレナがスタンガンを持って立っていた。

「あんた名前は？」

外灯の下、縛り上げた男を路地裏で尋問する。

「あんたら、警察じゃないんだろ？ 賞金稼ぎか？ おれ賞金でも掛かってるのか？」

「探偵よ」

「探偵？ 警察じゃないのか、探偵がどうして、俺を？」

「とぼけても無駄よ、あんたの<アダプタ>の中にガラージュA1のインターフェイス・ソフトが在って、盗まれた人工知能本体も持っていたことは分かってるの」

私は男が持っていた、人工知能の本体を突きつけた。

「そ、そのことか、勘弁してくれ、そのA1は役に立たないんだ。ガラージュを選ばせたら、ほとんどすべてのハウスミュージックを選んじまうんだ。返す、返すから、見逃してくれ」

私は思わずレナの方を見た。レナもこちらを見ていた。困惑している様子だった。

「というわけで、教授、犯人はここの一回生で、大学にはろくに顔を出さないたぐいの学生でした。クラブでDJを勤めていたんですが、自分の選曲に自信がなく、伝説のラリー・レヴァンの選曲ならDJとしてうまくやって行けるだろうと考えた末の犯行だったようです。」

事件のあらましを説明した。

「なるほど、それで犯人は？」

私が犯人を連れていないことが気になって仕方ないらしい。

「教授貴方は、学校側に今回の犯行を知られたくないとおっしゃいましたね」

「ああ、言った」

「犯人はチンピラで、余罪も沢山ありました。貴方が直接、事件を明るみに出すと交渉されるのは危険だと判断しました」

「どうして、そんな勝手なことを」

「依頼者の身の安全を守るのも探偵の仕事です。この場合、貴方の名誉と利益も含まれています」

「名誉と利益だと？」

「貴方の育てたガラージュA Iは正しく機能しない失敗作だった。違いますか？」

「どうして、それを……」

「貴方は、ミリッツ・エンターテインメントの助成金で開発した、選曲人工知能をガラージュを選び出すように教育した。が、それが裏目にでた。ガラージュはこの研究には不適切なジャンルだった」

「そうだ、そのとおりだ。もともと、ガラージュはラリー・レイヴァンが自分の好みで選曲した。なんの統一性のないジャンルで、彼の死後も、ガラージュはどんどん増えていった。私はすべてのガラージュと呼ばれる音楽の要素を抽出し、その要素を含む音楽のすべてをガラージュとして選ぶように教育すれば正しく機能すると思っていた」

「ところが、ほとんどすべてのハウス音楽をガラージュとして選びだしてしまうようになってしまったってことですね」

「頼むこのことは内密にしてくれ、金なら払う。いま、ミリッツ・エンターテインメントに投資を引き上げられるわけにはいかないんだ。それだけじゃない。これが表沙汰になれば必ず、総長選に響いてくるんだ。頼む黙っていてくれ、いくらほしい」

「捕まえてきた犯人にもそうやって、金で口止めをするおつもりだったんじゃないですか？」

教授は黙り込んだ。

「ご安心ください。犯人の口からこのことが漏れることはありません。犯人は学内政治のことなど分からないチンピラで、余罪もあり、それらを見逃し警察にも通報しないという条件でガラージュA Iを返却させました。今後つかまったとしても、わざわざ自分の罪を増やすような供述はしないでしょう。私に関しては、守秘義務があります。無論、報酬をお支払いいただくことが前提ですけれども」

私はにこやかに笑ってみせてみた。

ラナ・ストリートのクレープ屋、バルスームでキャラメルバナナ生クリームを頬張りながら、レナにメッセージで伝える。

「結局、成功報酬を貰えたわ」

「そう」

レナは声を出して一言答える。

「あんたそれで、猫見つけたのよね」

メッセージを送る。

「ええ、女の子からお礼の手紙を貰ったわ」

私は、クレープを咀嚼して飲み込み、声を出して言った。

「結局今回の事件の教訓は、ラリー・レイヴァンの精神はハウス全体に行き渡っているってことかしらね」

「ハウスの創始者と呼ばれる人はまた別の人よ」

レナはそう言ってコーヒーカップに口を付けた。

あとがき（2009年Mixi公開時）

ハウスをキーワードにググっていて、ガラージュに行き着いたあたりから この話は思いつきました。ネタ自体もガラージュにもうちょっと造詣が深ければ、もう少し面白いモノになったかもしれませんが、ネットで調べただけで書き始めてしまい。こうなりました。

探偵業を行う二人を女子高生にしたのは、単に今学園ものがはやってるから、という理由で女子高生にしてみました。それ以上なにも掘り下げていないのはお分かりのことと思います。むしろこの分量じゃあ掘り下げようもないです。モデルは有名な某アニメの女性キャラ二人です。このキャラをモデルにしてみたのも、この二人を原型にしたキャラが未だにもてはやされてるからです。この辺も習作故です。

それから、今一まだ、文章量の増やし方がわかりません。この作品、どうしたらこれ以上長くできるんでしょうか？ もう一展開加えるべきなのか、心理心情描写なので水増しすべきなのか判断が付きません。これからの課題の一つです。

追伸（2011年）

いまなら、長く仕方がわかるようになりました。例えば、実行犯と真犯人を分けて、もう一手間かければ、ながくなりますよね。例えば依頼者の失墜を狙う対立候補とか。いつか、その線でリテイクするかも。